

上級作文クラスにおける日本の新聞紙読者に向けての意見発信

田 中 典 子

1. 概要

2021年度春学期 SJ410/NP 7 作文クラスの実践について報告する。このクラスは全学向け日本語プログラムと短期留学生日本語プログラムの2つのコースの合同クラスの上級レベルの作文クラスである。当該クラスのレベル設定はCEFRではB2.2, JLPTではN2/N1レベル相当とされた。CEFRでは、B2レベルは自律した言語使用者とされ、「自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる」とされている。(ブリティッシュ・カウンシル¹⁾)

本クラスは作文クラスであるため、以下を授業目標とした。

- ・自分の関心がある多様な話題について、根拠を提示しながら、ある視点に賛成や反対の理由を挙げ、いろいろな情報や議論を評価した上で自分の見解を述べることができる。
- ・映画や本、演劇の評を書くことができる。
- ・独自の視点で自身が見つけた価値を作品にすることができる。

それぞれの目標は、(1) 新聞に投書する(意見文を書く)(2) ブックレビューを書く(3) 人物のストーリーを書くという授業活動に対応する。

2. 授業の進め方とポイント

本報告では前述の3つの授業目標のうち1つめの目標に対応する「投書」の授業内容について報告する。

「投書」は作文授業15週のうち5週で行った。投書を取り上げたのは、各々の意見を実際の新聞の日本人読者に向けて発信するためである。これにより漠然とした仮想の読み手に向けて意見を述べるのではなく、

はっきりとターゲットを絞り、留学生である自分達ならではの独自の視点で発信すべき内容を書くことを目指した。そのため、最終的に授業の中で完成した投書はそれぞれ、学生自身が選んだ新聞の投書欄に投稿することとした²⁾。

以下は各週の構成である。

第1週：新聞の「投書」の目的・対象・特徴を考える。発信したいテーマ・トピックについて考える。

第2週：テーマを絞って、自分が書く内容について、「だれ」に届けたいのか、「なぜ」それを発信したいのか、読んでもらうためにどのような工夫が必要かを考え、アウトラインを作成する。

第3週：チェックポイントにしたがって、アウトラインを見直す。留学生の自分が日本人の読者に発信する意義、留学生だからこそそのオリジナリティがそこにあるかを問い直す。初稿を書く。

第4週：①新聞紙掲載の投書を読んで、自分がおもしろいと思った投書について分析してみる。なぜその投書に関心を持ったのかを考え、自分の投書に生かす。②客観的に自分の投書を読み、再構築する。お互いに読み合って、アドバイスをしあう。第2稿を提出する。

第5週：授業内で原稿を完成する。最終チェックでは新聞に載るためにはどんなことが必要か、3つのチェック項目を各グループで考えて、それにしたがって、原稿をチェックして最終稿を提出する。提出された最終稿の文法チェックが返却されたら、新聞社に投書を送る。

授業内の活動の進め方はZoomのブレイクアウトルームでグループに分かれ、上記の活動内容を話し合いながら進める方法をとった。組み合わせは毎週変えた。第5週では、さらにGoogleのスプレッドシートを活用し、グループごとにシートを分けて、協働作業を行った。

教師はブレイクアウトルーム間を巡視し、学生からの質問に答えた。また、提出された課題にはコメント

を入れ、返却した。

グループワークはそれぞれのペースで進められた。構成員のトピックが異なり多岐の内容に渡り話していたグループと、トピックがコロナウイルス関連に集中して、自国の状況や各々の想い、考えを共有しあうグループもあった。2021年前半はコロナ禍が2年目で来日できない学生も多く、社会問題として労働環境、社会システム、個人の健康問題について発信しあっていた。

スプレッドシートを利用したことで、以下の利点があった。コメント機能を使って、書き直しのためのアドバイスを書いたグループは、お互いの書き直しや工夫の過程がわかった。また、スプレッドシートに最終作品を書き込むことが全体発表の代わりになり、全員の完成した投書を自由に読むことが可能になった。

3. 今後に向けて

本クラスでは、投書を通して自分の意見を日本人読者に問うことを目指した書く活動を行った。真正な読み手がいるということは書く姿勢や表現の工夫につな

がっていった。授業ではグループ活動を取り入れ、自分の意見をまとめるために他者と意見の往還を繰り返した。クラスの構成員は他にも共通の授業を受講しており、受講生同士の人間関係が構築されていたため、書く前のブレインストーミング、話題についての議論、お互いの原稿についてのピアリ spons も活発に進められ、投書の内容を深めることにつながった。

今後も、多様な社会活動、言語文化教育を念頭においた書く授業を目指したい。

注

- 1 ブリティッシュ・カウンシルのWebサイトCEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment : ヨーロッパ言語共通参照枠)

<https://www.britishcouncil.jp/programmes/english-education/updates/4skills/about/cefr>

- 2 朝日新聞「声」、読売新聞「気流」、毎日新聞「みんなの広場」、中日新聞「発言」